

筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎との対面交流を通して

～これまでのオンライン交流とは違う経験をして～

大谷津 和之・加藤 真弓・木村 美津子・横山 和代

令和2年度から始まった新型コロナウイルス感染症による影響は令和5年まで及び、寄宿舎行事や生活環境も大きく変わった。この間に行事の代案の1つとして、舎生会役員を中心に筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎とのオンライン交流を試み、今年で4回目を迎えた。なお、この4回目は初めて対面交流を果たした。その取り組みを報告する。

キー・ワード：筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎 対面交流 他障害 交流にあたっての配慮

1 はじめに

本校寄宿舎では、30名の舎生が生活している。(令和5年度)令和5年5月には3年続いた新型コロナウイルス感染症について、国が感染症法上の2類相当から5類になり、季節性インフルエンザと同様の取扱いとすることが決定された。それに伴い、引き続き感染対策に気をつけながらコロナ前の生活に戻しつつある。

コロナ禍の時に行事の代案として行った筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎(以下盲学校寄宿舎)とのオンライン交流も、この機に対面交流をやってみたいという舎生の強い希望もあった。これを受けて、本校寄宿舎側から盲学校寄宿舎に訪問することで計画を立てた。その取り組みと様子を報告する。

2 対面交流会実施に向けて

(1) 懸念およびねらい

異なる障害者同士の対面での交流を実施するにあたり、懸念されるのがコミュニケーション面である。特に視覚情報が優位の聴覚障害者と聴覚情報が優位の視覚障害者とは、合理的配慮の方法が異なる。オンラインでは画面に映すことで全体で見ることができ、少ない通訳者でも対応できたが、対面となると限界がある。そのため、寄宿舎指導員による通訳は必要最低限とした。また、直接コミュニケーションをとることで、お互いに必要な配慮について考え、興味から関心・理解へとつなげてほしいという目的のもと、以下のねらいを立てた。(Table 1)

Table 1 交流会のねらい

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①視覚障害に対する関心、理解を深める。②手話通訳や読み取り通訳を介さず、視覚障害者と直接コミュニケーションを取る方法を考える。③聴覚障害への配慮について伝える。④視覚障害への配慮について考える。⑤お互いの寄宿舎生活について知る。 |
|--|

(2) 事前学習会

昨年度までは寄宿舎行事の一環として舎生会役員を中心に交流を重ねてきたが、今回は視覚障害について興味・関心がある舎生を中心に行いたいと考え、舎生全体へ参加者を募った。

対面で実施するにあたり、交流会の内容を両校で検討を行った。

内容を考えるにあたって事前学習会を設け、盲学校寄宿舎との交流会に至る経緯、今まで3回行ってきたオンライン交流の内容と様子、視覚障害とはどのような障害かを説明した。

そのことを踏まえアンケートをとった。盲学校寄宿舎に行きたいこと(Table 2)と盲学校舎生と一緒にやりたいこと(Table 3)を見ると、お互いが持つ障害について関心が高いことが窺えた。

Table 2 盲学校寄宿舎に行つて知りたいこと

(1) 盲学校寄宿舎に行つてやりたいことは？（見たいもの、知りたいこと、伝えたいことなど）自由記述	
①盲学校の設備について	<ul style="list-style-type: none"> ・建物にどのような工夫がされているのか知りたい。 ・盲学校特有の設備を見てみたい。 ・盲学校の寄宿舎ではどのような工夫がされているか知りたい。
②視覚障害学生の生活について （学校生活・日常生活）	<ul style="list-style-type: none"> ・スマホが普及しているが、どのようにしてスマホを使っているのか。 ・場所はどのようにして分かるのか。 ・食事のときはどのように工夫をしているのか。 ・どのように勉強（授業）をしているのか。教科書は点字なのか。 ・ピアノはどのようにして弾いているのか。
③視覚障害者が使っている補助具について	<ul style="list-style-type: none"> ・目の見えない人が日常的に使う道具は何か。 ・弱視の場合、文字をどのような道具で読んでいるのか。
④生活で困っていることは？	<ul style="list-style-type: none"> ・生活する上で困っていること、私たちができることは何か。 ・晴眼者に協力してほしいこと。 ・目に障害を持って困ること。
⑤コミュニケーションをとりた い	<ul style="list-style-type: none"> ・ろう者とのコミュニケーションについて伝えたい。 ・グループに分かれて自己紹介。 ・自分たちのことを伝えるのもいいのでは。
⑥点字体験	<ul style="list-style-type: none"> ・点字を打ちたい、読みたい。

Table 3 盲学校舎生と一緒にやりたいこと

(2) 盲学校舎生と一緒にやりたいことは何ですか？（自由記述）	
<ul style="list-style-type: none"> ・雑談 ・自己紹介やお互いの障害について知る ・物を説明して当ててもらおうクイズ ・重量勘ゲーム ・味覚クイズ ・「夢をあきらめないで」を一緒に歌いたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害者、聴覚障害者に関するクイズ ・ピアノを弾きたい ・手話クイズ ・オセロ・トランプ

(3) イベントの事前準備

オンラインミーティングでは、アンケートを元に、両校の舎生同士で相談をしたその結果を受けて、「手話クイズ」「障害あるある」「補助具紹介」の3つに分かれて準備を進めた。各グループのリーダーには

昨年度の交流会経験者を配置した。また、直接コミュニケーションを取る方法については、文字変換アプリ（UD トーク）や音声読み上げアプリ（こえとら等）を準備した。

3つのグループの工夫点は以下の通りである。

① 手話クイズ

手話を表現し、3 択の中から選んでもらう方法でクイズを行った。回答の札が見やすく、触って確認できるように色と形を変えて作成した。

② 障害あるある

音声読み上げアプリの音声について、聴こえやすいかどうか寄宿舎指導員に確認する様子があった。手話のスピードと合うように速度を調整したり、声質は本人の年齢に近いものに合わせたりした。

③ 補助具紹介

実際に触ってもらえるもの、かつ持ち運びができ、日頃からよく使用するものが良いと考え、補聴器・振動式目覚まし時計・振動式体温計にした。補聴器の掛け方や色など視覚的な情報も伝えるようにした。

(4) 交流会中のルールの見直し

UD トーク画面の確認や音声読み上げアプリに文字入力をする際に時間がかかるため、⑤を追加した (Table 4)。

盲学校舎生にとっては明瞭でなくても音声で伝えてもらうことが良いが、発声に抵抗がある本校舎生もいたため、盲学校舎生には「待つ」の手話を事前に覚えてもらい、本校舎生には机を 2 回叩くことで「待つ」と伝わるようにした。

Table 4 交流会中のルール

①全体場で発言するときは、手を挙げてから自分の名前を言う。
②相手に発言の終了が分かるように「終わり」と言うようにする。
③相手に内容が理解できたか示すため、拍手やうなずくなど、リアクションを積極的に取る。
④内容が理解できなかった場合は、遠慮なく積極的に聞き返す。
⑤文字入力などで時間がかかる時は、「待つ」と言うか、「待つ」の手話をする。または、机を 2 回叩くようにする。

(5) 前日リハーサル

寄宿舎指導員が全盲生徒役となり、リハーサルを行ったところ、実際にどう接したらよいか分からず戸惑う様子が見られた。

① 手話クイズ

全盲生の前に座って無言で手話を表現していた。何をしているのか分からないと伝えると、触手話をしたり、音声読み上げアプリを使って説明したりする方法に変更した。

② 障害あるある

肩を叩いて呼びかけるデモンストレーションを前に出て来て行うことにしていたが、全盲生の移動の負担を軽減するため、その場に立ってもらうことに変更した。

③ 補助具紹介

グッズの説明を一旦し終えてから触ってもらうことにしていたが、説明しながら触ってもらう方が分かりやすいことを伝え変更した。

視覚障害への配慮について考えながら事前準備を進めてきたが、リハーサルをしたことで、足りていない部分に気付くことができた。また、交流会本番に向けての心構えを持つことができた。

3 交流会の日程

交流会の日程は以下の通りである (Table 5)。

Table 5 交流会の日程

【日時】 令和 5 年 9 月 24 日	
午前 11 時～午後 2 時 45 分	
【参加者】 (本校) 舎生 9 名・職員 3 名の計 12 名 (盲学校) 舎生 10 名・職員 3 名の計 13 名	
【プログラム】	
I 自己紹介	V 手話クイズ
II 舎内見学	VI 障害あるある
III 点字体験	VII パースデーチェーン
IV 補助具紹介	VIII 手話ソング

4 交流会当日の情報保障

(1) 舎生

本校側が発表する時は、発音の明瞭度が高い舎生は口話と手話を併用、コミュニケーション手段が主に手話である舎生は『こえとら』等文字を音声化するアプリを活用しながら手話を使うことにした。

盲学校側も、パワーポイントや『UD トーク』の音声認識アプリを積極的に活用していた。また、指文字を覚えている盲学校舎生は、指文字で説明したりしていた。

(2) 職員の働きかけ

本校舎生が口話と手話を併用で話す時は、マイクに手話が当たらないようにしたり、アプリを使う際も盲学校側にも音声が届くようにマイクの位置を工夫したりした。

盲学校側からの補足説明や質問等に応じて手話通訳、本校舎生から質問があった時も同様に必要に応じて読み取り通訳を行った。

5 交流会当日の舎生の様子

(1) 自己紹介

自己紹介の際は、自分に合ったコミュニケーション方法で自己紹介することに決めた (Fig. 1)。それぞれ自分に合った方法で自己紹介し、内容が伝わると安堵の表情を浮かべる様子が見られた。盲学校側は、全員手話を使って自己紹介を行っていた。



Fig. 1 舎生が自己紹介している様子

(2) 舎内見学

設備や部屋の紹介に限らず、例えばピアノや琴が置いてある理由や和式トイレには足を置くところが

少し盛り上がっている理由等、盲学校の特徴や視覚障害者が生活する上で工夫しているところの説明を受け、興味深く見入っていた。

(3) 点字体験

盲学校舎生に点字の仕組みや打ち方を教わりながら、実際に点字器で自分の名前を打つ体験を行った。最初は慣れない様子であったが、打ち終わった後から「合っていますよ」、「上手に打っているよ」と言われ、本校の舎生も嬉しそうにしている様子があった。

(4) 補助具紹介

盲学校・本校が紹介した補助具は、以下の通りである (Table 6)。

Table 6 補助具の紹介

盲学校		聾学校
点字教科書	ブレイルメモ	補聴器・人工内耳
拡大読書器	単眼鏡	振動式体温計
ルーペ	白杖	振動式目覚まし時計

盲学校側の紹介では、弱視や全盲に合った補助具を実際に目にして、視覚障害者がどのように学校で授業を受けているか、イメージがより浮かぶことができたと考える。

本校側が紹介した補助具の中で、盲学校舎生が一番関心を示していたのは「振動式目覚まし時計」である。バイブレーターの振動が予想以上に強かったのか、大きく反応する舎生が多く見られた (Fig. 2)。



Fig. 2 補助具について説明している様子

(5) 手話クイズ

弱視の舎生を2グループ、全盲の舎生を1グループの計3グループに分けた。弱視のグループには、本校舎生が一人ずつ付き、こちらが手話を繰り返し表現しながら見てもらった。全盲のグループは、全盲の舎生に本校舎生が一人ずつ付き、前日のリハール通り触手話のように全盲の舎生の手を触りながら手話の形に導いていた (Fig. 3)。

盲学校舎生は「何の手話だろう？」と悩む様子が見られたが、正解すると歓声が湧き、終始楽しく盛り上がっていた。



Fig. 3 全盲の舎生に手話を教えている様子

(6) 障害あるある

日常生活を通して、「障害あるある！」と感じたエピソードを両校から発表形式で行った。本校側が紹介した“障害あるある”は、以下の通りである (Table 7)。

Table 7 本校が紹介した“障害あるある”

- | |
|--------------------------------|
| ① 相手を呼ぶとき、机を叩いたり電気を付けたり消したりする。 |
| ② どんなに悪天候でも外が騒がしくてもぐっすり寝られる。 |
| ③ 地域によって、手話の表現が異なる。 |

障害は異なるが、お互いの“障害あるある”に笑い声があふれたり「なるほど！」と相槌を打ったりする等、相互理解を深めていた。

(7) 手話ソング「夢をあきらめないで」合唱

交流会の最後は、ピアノとギターの生演奏で本校寄宿舎のテーマソングである「夢をあきらめないで」を皆で歌った。この日のために、盲学校舎生も手話を覚え、最後まで全員一緒に歌うことができた。

障害を越えて皆の気持ちがひとつになって合唱し、より臨場感が高まった。

(8) 交流会後のアンケート (Table 8) と考察

本校舎生が書いた感想を見ても、交流会を行う事前、事後では、本校舎生の意識も変わってきたように感じる。対面で行うことで、不安から自信に繋がったことや、次行うときには盲学校舎生側の配慮を考えた内容を挙げている感想が多かった。このことから、盲学校舎生が、聴覚障害のある本校舎生にどのようにしたら伝わるのかを一生懸命考え工夫してくれたことに対する感謝する気持ちが窺えた。

Table 8 交流会後のアンケート

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・通訳なしでコミュニケーションを取ることは不安な気持ちでいっぱいだったが、アプリを活用して話すことができ、心が繋がったような気がした。 ・視覚障害者とのコミュニケーション方法が分かり、社会に出る勇気もらった。 ・視覚障害のことも知ることができ、良かった。 ・盲と聾の特有のルールもあり、反応が見て分かったので、「伝わっている」と実感できた。 ・視覚障害者が使っているものでゲームをしてみたい。 ・今度は聾学校側が引率できるような活動をしたい。 ・雑談タイムを増やしてほしい。コミュニケーションを取るのは大変だけど、会話ができれば自信に繋がるはず。 ・人同士がぶつかることが多かったので、そばを通るときは合図を考えた方が良さ。 |
|---|

対面交流の後にお互いの学校や障害に関する質問が出てきていることから窺えるように (Table 9)、視覚障害者に対する興味・関心が深まり、「伝えたい」「わかり合いたい」という気持ち

が大切だということ、自らの生活についても考える良い機会になったのではないかと考える。

今回の対面交流では、コミュニケーションに関するアプリがとても役に立ったが、このように今後もコミュニケーションを支援するアプリを有効活用する経験を重ねていくことで、多様なコミュニケーション方法を知り、コミュニケーションに対する不安解消や自信に繋がるのではないかと考える。

それも踏まえて、職員もコミュニケーション支援に関するアプリについて、情報を収集、試用しながら舎生一人ひとりの実態に合った方法を探っていかなければならない。そして、今回参加した本校舎生が盲学校舎生の「やってくれたこと」の良い気づきを、次に続く交流の経験がない舎生にどのように伝え、繋げていくかが課題である。

6 まとめと今後の展望

盲学校寄宿舎に訪問して、実際に触れあうことで他障害のことを知ってそれで終わりというのではなく、今後自分の障害をどのように周りに伝えていくかを考えるいい機会になったのではないかと考える。

また、コロナがまん延している最中に入舎し、行事運営を経験していない本校舎生にとっては今回の盲学校寄宿舎との対面交流は初めての試みであり、日々の寄宿舎生活では得られないものを経験できたのは大きい。

今回、行事運営の大変さや皆と一緒に力を合わせて行うことの大切さを、この交流を通して知ることができた。今後もこのような行事の場を設けていくことで舎生の活動の幅も広がり、成長に繋げられると考えている。

Table 9 両校の質問内容

質問内容（盲学校側）	質問内容（聾学校側）
盲学校の寄宿舎と違うところは何ですか。	附属視覚特別支援学校の生徒（高1～高3）の人数はどれくらいですか。学年の定員は何人ですか。
視覚障害では、美術、古典や歴史が難しいですが、聴覚障害で難しいと感じる教科は何ですか。	日常生活で不便なことはなんですか。
もし明瞭に聞こえたらやりたいことは何ですか。聴きたいことは何ですか。	普段はどのようにして授業を受けていますか。
補聴器や人工内耳は空港等の X 線検査にひっかかりますか。MRI は受けられますか。	部活はありますか。あるのであればどのようにして部活をしていますか。
聾学校の生徒同士は話が盛り上がっているときに声をかけられたらどのようにして気づくのですか。	1日の流れを聞いてみたい。ちょっとした失敗のエピソードを聞いてみたい。
点字は小学校で学びますが、手話はいつ学びますか。	附属盲学校の自慢できるところはなんですか。
好きな手話は何ですか。	覚えてみたい、知りたい手話はありますか。

〔参考文献〕

大谷津和之・村井保（2023）

筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎とのオンライン交流を通して、筑波附属聴覚特別支援学校紀要, 45. 101-108

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。